

12-f 一 低出生体重児の「幼若乳児ビタミンK 欠乏性出血症」の症例調査一

国立岡山病院小児科

研究協力者 駒 沢 勝

昨年度の全国症例調査により、53～55年の3年間で425例の発症が集計されている。本症の低出生体重児での発症状況を調査する目的で、全国105のAクラス未熟児施設に対しアンケート調査を行った。

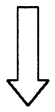
74施設（70.5%）より回答を得、そのうち10施設で、昭和53～55年の3年間に14例の発症が認められた。一部地域への集中はなく、全国的に散発していた。男：女は7：7であった。凝血学的に診断されたものは11例で、3例は臨床的になされていた。出生時体重は980～2,480gで、発症週例は2週～8週で、低出生体重児でも、1カ月前後が本症の危険期となっていた。発症時体重は、1,200～4,950gで、体重増加と発症との間に一定の関係は見出せなかった。栄養法は、母乳が8例と多いが、混合2、ミルク4例と、人工乳による症例も意外に多かった。誘因、基礎疾患は、1例に肝疾患を認めた他はなかった。発症前にビタミン

Kを投与されていないものが10例と多く、1例は不明であったが、3例は投与を受けていた。これらは、生後2日及び4日、0日、0日に投与されており、発症は、それぞれ8週、3週、4週であった。出血部位は、頭蓋内が8例、皮膚・可視粘膜6例、消化管3例、注射穿刺部位4例であった。頭蓋内出血をきたした8例のうち、2例が死亡し、3例が後遺症を残し、3例が全治していた。他の部位の出血後の経過はおおむね良好であった。

低出生体重児は、母乳のみで養育される例が少ないこと、ビタミンKをルーチンに投与する施設が多いこと、及び凝血学的検査などにより本症の予防が努められていることなどが、本症の発症を少なくしているのではないかと思われた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



低出生体重児は、母乳のみで養育される例が少ないこと、ビタミンKをルーチンに投与する施設が多いこと、及び凝血学的検査などにより本症の予防が努められていることなどが、本症の発症を少なくしているのではないかと思われた。